

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	乙第1247号	氏名	草刈麻衣
論文審査担当	主査 菅野祐幸 副査 梅村武司・福島菜奈恵・犬飼岳史		

### (論文審査の結果の要旨)

胃食道逆流症（以下 GERD）の合併症として、狭窄や食道の円柱上皮化（バレット食道）を引き起こすびらん性食道炎があり、バレット食道は食道腺癌の前駆病変として唯一認識されている。日本の成人においては GERD の有病率増加が報告されているが、小児患者における GERD の有病率についてはほとんど知られていない。本研究では、日本の単一施設（昭和伊南総合病院）の内視鏡センターにおいて内視鏡的に証明された小児 GERD 患者の有病率を 2005 年から 2012 年、2013 年から 2019 年にかけて比較し検討した。

以下の結果を得た。

- 1) 2005 年から 2012 年までの 315 人 [平均年齢 13.8 範囲(5-18) 歳、男児 147 人]、2013 年から 2019 年までの 259 人 [平均年齢 14.7 (範囲 5-18) 歳、男児 108 人] が評価の対象となった。
- 2) びらん性食道炎またはバレット食道の割合は、後半の期間のグループで有意に増加した (GERD は 9.8% から 18.1%、 $P = 0.0045$ 、バレット食道は 2.5% から 9.6%、 $P = 0.0003$ )。
- 3) バレット食道を伴う GERD 患者の割合は有意に増加した [53.3% (24/45) 対 25.8% (8/31)、 $P = 0.017$ ]。
- 4) バレット食道患者は、プラハ分類 COM1 の患者数が 3 人から 17 人、C1M1 の患者数が 5 人から 7 人と増加傾向を認めた。
- 5) 76 人の患者のうち 55 人 (72.4%) で組織病理学的評価を行なったが、腸上皮化生はどの検体でも認められなかった。

逆流性食道炎及びバレット食道の有病率は、本研究においてこの 15 年間で大幅に増加していることが示された。バレット食道患者のうち 7 人は 15 年間で数回の EGD を施行されたが、内視鏡所見に変化はなく杯細胞出現も認めなかった。本邦では小児におけるバレット食道の自然史については明確になっていない。本邦の小児において GERD の疫学の変化、その危険因子を把握し、前癌病変であるバレット食道の自然経過を明らかにしていくことは非常に重要であり、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。

